

と積極性がある。往生を命終ののちに実現するものとするのではなく、現生に正定聚に住する生の実現をもって、往生の積極的な内容とするところに、親鸞の往生理解の独自性がある。住正定聚ということは、曇鸞が教示しているように、本来安楽浄土の徳として了解されるものである。それを親鸞は、教言の聞思を尽くして、選択本願の行信に、すなわち本願の名号に帰する一心帰命の信において自証されるものと了解されたところに、親鸞の己証がある。その代表的な文を掲げてみよう。

(1) 本願を信受するは、前念命終なり。

〔すなわち正定聚の教に入る〕文

〔即の時必定に入る〕文

〔また必定の菩薩と名づくるなり〕文

即得往生は、後念即生なり。

他力金剛心なり、知るべし。

〔愚禿鈔〕・〔真宗聖典〕四三〇頁

(2) 「此即是願往生行人」というはこれすなわち、往生をねがう人という。「命欲終時」というは、いのちおわらんとせんときという。「願力撰得往生」というは、大願業力撰取して往生をえしむといえるころなり。すでに尋常のとき、信樂をえたる人をいうなり。臨終のとき、はじめて信樂決定して撰取にあずかるものにはあらず。ひごろかの心光に撰護せられまいらせたるゆえに、金剛心をえたる人は正定聚に住するゆえに、臨終のときにあらず。かねて尋常のときよりつねに撰護してすてたまわざれば、撰得往生ともうすなり。このゆえに「撰生増上縁」となづくるなり。

〔尊号真像銘文〕・〔真宗聖典〕五二二頁

(3) 「致使凡夫念即生」というは、「致」は、むねとすという。むねとすというは、これを本とすということばなり。いたるという。いたるというは、実報土にいたるとなり。「使」は、せしむという。「凡夫」は、すなわち、われらなり。本願力を信樂するをむねとすべしとなり。「念」は如来の御ちかいをふたごころなく信ずるをいうなり。「即」は、すなわちという。ときをへず、日をへだてず、正定聚のくらいにさだまるを即生というなり。「生」

は、うまるといふ。これを「念即生」ともいうなり。また「即」は、つくといふ。つくといふは、くらくらにかならずのぼるべきみといふなり。世俗のならいにも、くにの王のくらくらにのぼるをば、即位といふ。位といふは、くらくらといふ。これを東宮のくらくらに在るひととは、かならず王のくらくらにつくがごとく、正定聚のくらくらにつくは、東宮のくらくらのごとし。王にのぼるは、即位といふ。これはすなわち、無上大涅槃にいたるをもうすなり。信心のひとは、正定聚にいたりて、かならず滅度にいたると、ちかいたまえるなり。これを「致」とすといふ。むねとすともうすは、涅槃のさとりをひらくをむねとすとなり。〔一念多念文意〕・〔真宗聖典〕五四四頁

(1)の文は、善導の『往生礼讃』の文について、(2)の文は、善導の『観念法門』の「撰生増生縁」の文について、(3)の文は、善導の『法事讃』の「致使凡夫念即生」の言について、それぞれ親鸞の了解を述べたものである。善導のものとこの文の意味は、いずれも未來往生を意味するものであったものを、親鸞は、本願の名号に帰する一心帰命の信に開かれ、実現する真実の生を、往生と捉え、往生の内容を現生に正定聚に住した生の営みと了解されたのである。

親鸞は、晩年の著『浄土三経往生文類』において、浄土の三経の教説に基づいて、独自の往生理解を述べている。

(1)大経往生といふは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらくらに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿彌陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗教とす。このゆえに大経往生ともうす。また難思議往生ともうすなり。〔真宗聖典〕四六八頁

(2)親経往生といふは、修諸功德の願により、至心発願のちかいにいりて、万善諸行の自善を回向して、浄土を欣慕せしむるなり。しかれば、『無量寿仏親経』には、定善・散善、三福・九品の諸善、あるいは自力の称名念仏をときて、九品往生をすすめたまえり。これは他力の中の自力を宗教としたまえり。このゆえに親経往生ともうすは、これみな方便化土の往生なり。これを双樹林下往生ともうすなり。〔真宗聖典〕四七一頁

(3) 弥陀経往生というは、植諸徳本の誓願によりて不果遂者の真門にいたり、善本徳本の名号をえらびて万善諸行の少善をさしおく。しかりといえども、定散自力の行人は、不可思議の仏智を疑惑して信受せず、如来の尊号をおのれが善根として、みずから浄土に回向して、果遂のちかいをたのみ。不可思議の名号を称念しながら、不可称・不可説・不可思議の大悲の誓願をうたがう。そのつみ、ふかくおもくして、七宝の牢獄にいましめられて、いのち五百歳のあいだ、自在なることあたわず、三宝をみたてまつらず、つかえたてまつることなしと、如来はときたまえり。しかれども、如来の尊号を称念するゆえに、胎宮にとどまる。徳号によるがゆえに、難思往生ともうすなり。不可思議の誓願、疑惑するつみによりて、難思議往生ともうさずとしるべきなり。

〔真宗聖典〕四七三―四頁

『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の三経の教説に基づく三往生は、親鸞が「化身土巻」で表明されたいわゆる三願転入の信仰的自覚の歷程が、単に三願の転入ではなくて、まさに三往生の自覚的展開であったことを踏まえて確かめられた、親鸞の三往生観である。いま大経往生と観経往生について、若干の考察を試みたい。

二

浄土教の伝統的な解釈によれば、往生ということとは、此土に命終して彼土に生まれて滅度を証する、という意味であった。したがって三往生のうち、観経往生、すなわち雙樹林下往生こそ、浄土教の歴史とともに古い往生観であったと思われる。浄土仏道の根本課題は、往生浄土という宗教的要求をいかに満足し、実現するかという、その一点にあるといえるが、その浄土欣慕の最も熾烈な態を、観経往生に見ることができるところである。

観経往生とは、「修諸功德の願により、至心発願のちかいにいりて、万善諸行の自善を回向して、浄土を欣慕せしむるなり」といわれる立場である。浄土を欣慕し、欣求する心は、この現実を穢土と観じて、穢土を厭離しようとする

る魂の要求に支えられたものである。自らの立つ世の現実を穢土と観じ、しかも厭離されるべきものと感ずるところには、人間の耐えがたい深刻な苦悩がある。人間のもつ深く重い苦悩が、厭離穢土・欣求浄土といわれる魂の要求を生み出すのである。しばらく『観経』の教説に耳を傾けて見よう。

時に韋提希、幽閉せられ已りて、愁憂憔悴す。はかに耆闍崛山に向かいて、仏の為に礼を作して、この言を作さく、「如来世尊、在昔の時、恒に阿難を遣わして来らしめて、我を慰問したまいき。我いま愁憂す。世尊は威重にして、見たてまつること得るに由なし。願わくは目連と尊者阿難を遣わして、我がために相見せしめたまうべし。」この語を作し已りて、悲泣雨涙して、はるかに仏に向かいて礼したてまつる。未だ頭を挙げざる頃に、その時に世尊、耆闍崛山にましまして、韋提希の心の所念を知るしめして、すなわち大目犍連および阿難に勅して、空よりして来らしめたまう。仏、耆闍崛山より、王宮に没して出でたまう。(中略)時に韋提希、仏世尊を見たてまつりて、自ら瓔珞を絶ち、身を挙げて地に投ぐ。号泣して仏に向かいて白して言さく、「世尊、我、宿何の罪ありてか、この惡子を生ずる。世尊また何等の因縁ましましてか、提婆達多と共に眷屬たる。

唯、願わくは世尊、我がために広く憂悩なき処を説きたまえ。我当に往生すべし。閻浮提・濁惡世をば樂わず。この濁惡処は地獄・餓鬼・畜生盈満して、不善の聚多し。願わくは我、未來に惡声を聞かじ、惡人を見じ。いま世尊に向かいて、五体を地に投げて、求哀し懺悔す。唯、願わくは仏日、我に清淨の業処を觀ぜしむることを教えたまえ」と。その時に世尊、眉間の光を放ちたまう。(中略)時に韋提希、仏に白して言さく、「世尊、このもろもろの仏土、また清淨してみな光明ありといえども、我いま極樂世界の阿弥陀仏の所に生まれんと樂う。唯、願わくは世尊、我に思惟を教えたまえ、我に正受を教えたまえ。」

〔真宗聖典〕九一―三頁

わが子阿闍世の逆害において、愁憂憔悴するものとなった韋提希の苦悩と、その苦悩の底から世尊に向けられた愚痴の叫び、さらに仏の沈黙の大悲に遇うて求哀し懺悔し、そこから生まれた清淨の業処を祈り求める、韋提希の宗教

的希求を憶うて見よう。苦悩と罪障の身の悲傷と、その喘ぎの中から祈り求める往生の願い、それが欣求浄土の願生心である。厭離穢土・欣求浄土という宗教心は、人間の現実の重い苦悩とその罪障の身の自覚から滲み出る祈求であるが、しかしそれ故にこそ、祈求という形で求められる往生浄土は、命終という死の彼方に期待されるより他はないであろう。

山を出でて、六角堂に百日こもらせ給いて、後世を祈らせ給いけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文をむすびて、示現にあずからせ給いて候いければ、やがてそのあか月、出でさせ給いて、後世の助からんずる縁にまいらせんと、たずねまいらせて、法然上人にあいまらせて、又、六角堂に百日こもらせ給いて候いけるように、又、百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にも、参りてありしに、ただ、後世の事は、善き人にも悪きにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば、上人のわたらせ給わんところには、人はいかにも申せ、たとい悪道にわたらせ給うべしと申すとも、世々生々にも迷いければこそありけめ、とまで思いまいらす身なればと、ようように人の申し候いし時も仰せ候いしなり。

〔惠信尼消息〕・〔真宗聖典〕六一六―七頁

親鸞の六角堂参籠の状況を見事に伝えている『惠信尼消息』に、「後世を祈らせ給いける」「後世の助からんずる縁」「ただ後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば……」と述べられている。親鸞の六角堂参籠の実存状況には、『観経』の韋提希の欣求浄土の宗教心に相通ずるものがあるのではあるまいか。惠信尼が伝えているように、親鸞は確かに後世を祈ったであろう。後世を祈るとは、いかにも象徴的な表現であるが、親鸞が観経往生について述べた、「修諸功德の願により、至心発願のちかひによりて、万善諸行の自善を回向して、浄土を欣慕せしむるなり」ということではあるまいか。

『観経』は、一切の行、一切の善を定善・散善の二善に攝し、この定散二善をもって往生浄土の行となすのである。

『観経』において、韋提希の「我に清淨の業処を觀ぜしむることを教えたまえ」という請求に対し、さらに「我いま極樂世界の阿彌陀仏の所に生まれんと樂う。唯、願わくは世尊、我に思惟を教えたまえ、我に正受を教えたまえ」という韋提希の別選所求に対して、仏は

汝いま知れりやいなや、阿彌陀仏、此を去りたまふこと遠からず。汝当に繫念して、あきらかにかの國の淨業成じたまえる者を觀ずべし。

〔『観経』・『真宗聖典』九四頁〕

といつて、韋提希と未來世の一切衆生のために、定善と散善を教説されたのである。何故であろうか。それは、韋提希が自らの苦惱の激しさと深さのあまり、阿彌陀仏と阿彌陀仏の世界を無限の彼方に求めたからではあるまいか。仏は、阿彌陀仏とその淨土を觀ずる方法として、定善・散善の觀法を説かれたのは、むしろ「万行諸善の自善を回向して」という、その「自善」の破綻のために説かれたのではあるまいか。自善の破綻のみが如来の本願に値遇するただ一つの道であるからである。定善・散善の善行に堪え得ないもの、それがほかならぬこのわが身の嚴肅な事実なのである。すでに親鸞は、定散二善に堪え得ない身の事実を押さえて、「化身土卷」に

しかるに常没の凡愚、定心修しがたし、息慮凝心のゆえに。散心行じがたし、廢悪修善のゆえに。

〔『真宗聖典』三四〇頁〕

と告白している。定善・散善の行は、「常没の凡愚」という身の現実に呼び帰えし、呼び立たしめるのである。常没の凡愚の身に呼び帰えされたものにとつては、定散の善行は、いかに堪え難く修し難いものであるか。『観経』の九品の教説は、いわば定散の二善に破れて、下品下生の一生造悪の凡夫の機の自覺に立ち帰らせて、そこに善知識の教えのもとに念仏の教えに帰すべきことを教示するものである。そのことを鋭く洞見された善導は、

上來、定散兩門の益を説くと雖も、仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら阿陀仏の名を稱するにあり。

〔『観経疏』散善義・『真聖全』一・五五八頁〕

と喝破されたのである。

たしかに『観經』は、往生淨土の行として、定善十三觀と散善三觀を教説するものであるが、經の本意は、善導が喝破されたように、「仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら阿陀仏の名を称するにある」のである。念仏以外の諸行は、如来によって選捨された非本願の行であり、ただ念仏一行のみが往生淨土の行として、本願において選択摂取された本願の行なのである。念仏が往生淨土の行として正定の業であるのは、阿弥陀の本願の行であるからである。

一心に弥陀の名号を専念して、行往坐臥に、時節の久近を問わず、念念に捨てざるものは、これを正定の業と名づく、彼の仏の本願に順ずるが故に。

（『真聖念』一・五三八頁）

善導の「散善義」の就行立信のこの一文に出遇つて回心された法然は、念仏が正定の業である理由と根拠を、善導の「順彼仏願故」の一言に尋ね当てるのである。法然は『選択集』「二行章」において、称名念仏が正定の業である理由を問うて、

答て曰く、彼の仏願に順ずるが故に。意に云く、称名念仏はこれ彼の仏の本願の行なり。故にこれを修する者は、彼の仏願に乗じて必ず往生を得るなり。

（『真聖念』一・九三五頁）

と云つて、念仏は阿弥陀の本願の行であつて、行の廃立を決定するものは、ひとえに如来の選択本願であることを明らかにして置ける。善導の「散善義」就行立信の文に出遇い、阿弥陀の本願に帰依信順された法然は、選択本願の世界に深く沈潜し、その願心を深か深かと信証して、行の廃立の真的理由を尋究するのである。それが『選択集』「本願章」の勝劣難易論である。無論、一切の諸行を選捨して、念仏一行を選択して往生の本願となす阿弥陀の「聖意」は、われら凡夫衆生の測り知るところではない。しかし法然が「本願章」において、

聖意測り難し、輒く解するに能わず、然りと雖も、今試に二義を以てこれを解せば、一には勝劣の義、二には難

易の義なり。

〔真聖全〕一・九四三頁

といわれた仏意の推究は、われらの分別智をもって、如来の選択本願の意を客観的に尋ね問おうというものではない。衆生の分別智をもってはいかにしても測り難い仏意を、本願念仏に帰し、それを生きるものとなったこの身が、この信心が、わが身をして念仏に帰せしめた久遠の願心を、全存在を挙げて推求するのである。法然が自らの念仏の身を通して推知された念仏選択の聖意が、念仏のもつ勝・易の二徳であった。一切の諸行を選捨して、念仏一行を正定の業と選択撰取されたのは、念仏は勝・易の二徳をもつ本願の行であるからである。〔浄土和讃〕に

弥陀成仏のこのかたは

いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも

ひさしき仏とみえたまう

南無不可思議光仏

饒王仏のみもとにて

十方浄土のなかよりぞ

本願選択撰取する

〔真宗聖全〕四八三頁

と詠っているように、本願における選択撰取のはたらきは、「塵点久遠劫よりも、ひさしき仏」そのもののはたらきである。念仏は、阿弥陀仏の本願において選択された本願の行であるから、法然は

たとい別に回向を用いざれども、自然に往生の業となる。

〔選択集〕・『真聖全』一・九三七頁

といつて、念仏の不回向性を闡明にされたのである。さらに法然は、念仏は本願の行であつて、不回向の行であるから、いかなる意味においても衆生の発菩提心は無要である、と言いつたのである。発菩提心の行をも非本願の行と

して否定し廃捨した法然の立場は、発菩提心による行修をもって仏道を規制していこうとする立場そのものを否定し
尽くして、

諸行は機に非ずして時を失えり、念仏往生は機に当りて時を得たり。〔選択集〕・〔真聖全〕一・九八三頁

と云って、南無阿弥陀仏の念仏一行が往生浄土の行であることを、堂々と顕揚されたのである。

三

念仏が往生浄土の行であるのは、念仏は本願の行であるからであった。この法然の了解に導かれた親鸞は、本願の
行としての念仏の意義を、さらに根源化して選択本願の名号と捉え、如来回向の行、すなわち「大行」と解されたの
である。『教行信証』「行巻」の最初に、

諸仏称名の願 浄土真実の行
選択本願の行

と標挙して、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行
は、すなわちこれもろもろの善法を撰し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。か
るがゆえに大行と名づく。しかるにこの行は、大悲の願より出でたり。〔真宗聖典〕一五七頁

と述べているように、親鸞においては、念仏はまさに「大行」であり、その大行に開かれる信心は「大信」と解され
たのである。大行・大信といわれるときの「大」とは、如来を意味する言葉である。如来なるものの現前現行が大行
であり、如来なるものの現前としての大行に開かれる根源的な覚醒が、大信である。

「信巻」の最初に

至心信樂の願 正定聚の機

と標挙されて、

謹んで往相の回向を案ずるに、大信有り。大信心はすなわちこれ、長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術、選択回向の直心、利他深広の信樂、金剛不壞の真心、易往無人の淨信、心光撰護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり。この心すなわちこれ念仏往生の願より出でたり。

〔真宗聖典〕二二二頁

といわれている。

ここに眞実の行について、「しかるにこの行は、大悲の願より出でたり」といわれ、また眞実の信についても、「この心すなわちこれ念仏往生の願より出でたり」といわれて、行も信も共に選択本願を根拠となし、選択本願と決して別でないことが確認されている。つまり眞実の行、すなわち無碍光如来の名を称するという行は、大悲の願である諸仏称名の願を根拠とし、また眞実の信は、大悲の願である念仏往生の願を根拠となす根源的覚醒である、というのである。親鸞においては、行も信も選択本願であつて、選択本願の行信なのである。

浄土教の歴史において、本願の名号に帰した一心帰命の信、すなわち選択本願の行信を、最も自覚的に表白された言葉は、世親の『願生偈』の冒頭の文であらう。

世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願す。

〔真宗聖典〕一三五頁

この帰命の信の表白は、世親が教主世尊の根本教説である『大無量寿経』の教説に値遇して開かれた、根源的覚醒であることを語り告げている。この信心表白でいま注意すべきことは、「帰命尽十方無碍光如来」は、「尽十方無碍光如来に帰命す」という信心の表白であると同時に、それはそのまま「尽十方無碍光如来に帰命せよ」と名のり出る如来すなわち如来の名号である、ということである。生死流転のわれらの無明の闇を、その根底から摧破して、尽十方無碍光の世界に自己を喚び帰えさんと招喚し続ける如来の名のりを、いま深か深かとわが身に自証したという根源的覚

醒である。帰命の信とは、自らの無明存在の底を破つて名のり出る如来、如来の名号、すなわち本願招喚の勅命の自証以外の何ものでもない。帰命の信は、実は本願の名号の現前であり、現成であつて、本願の信である。親鸞は、帰命の信をつねに選択本願の行信と捉えたところに、親鸞の信仰的自覚の著しい特質があるのである。

親鸞は、この行信を成就する本願として二つの本願、すなわち諸仏称名の願と至心信樂の願とを挙げたのである。善導、法然が念仏往生の願の一願をもつて選択本願とされたのに対して、親鸞は、第十七・諸仏称名の願に名号成就の願を見出し、第十八・至心信樂の願を信心成就の願として捉えて、この二願をもつて選択本願と了解されたのである。行信の根柢を明らかにしようとすると、親鸞は因願の文のみでなく、その成就文をもつねに併せ掲げていることに注意すべきである。それは、因願以上に本願成就に立つて思索されているということではないだろうか。

願成就の文、『經』に言わく、十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量壽仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう。

〔真宗聖典〕一五八頁

本願成就の文、『經』に言わく、諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。

〔真宗聖典〕二二二頁

親鸞は、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と發遣する法然の教言に出遇い、それに育てられて念仏者へと転成し、尽十方無碍光の世界に甦つたのであるが、その信仰体験の原光景を、この本願成就の文に見い出されたと思われる。「十方恒沙の諸仏如来」とは何か。それは、念仏に帰して生きる歡びを得た無数の念仏者のことではあるまいか。その無数の念仏者、無量の諸仏が、みな共に阿弥陀如来の威神功德の不可思議なることを讃嘆し、われら衆生に如来の大悲に目覚ましめる真実の教えを聞けと、發遣しているのである。われわれは、この名号において、如来の功德を讃嘆する声を聞き、その發遣の声に育てられて、歡喜に満ちた大悲への深い目覚めを賜るのである。そ

の事実を成就文は、「諸有衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん」と教えているのである。

親鸞は、本願成就の文において、さらに重要な意味を見出したのである。それは、一つの本願成就文を、「信巻」の三心一心問答で、本願信心願成就の文と本願欲生心成就の文に分け、「至心回向」を「至心に回向したまえり」と訓むことによって、本願の成就は如来の本願力の回向成就であり、衆生における信心の成就の他ではないことを明らかにされたのである。本願成就文における独自の訓点は、親鸞の信仰体験の原光景を、そこに最も深く訓み取られた理解である。

しかれば、もしいは行・もしいは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまうところにあらざることをあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと。〔信巻〕・『真宗聖典』(二三三頁)

親鸞は、信仰的自覚における客観的契機である名号のみが如来の回向ではなく、名号に開かれる信心も、如来の願心の回向成就であるということをも、明瞭に尋ね当てられたのである。如来の大悲心である本願は、いま現に発起している信心として体験されるのであるが、その信心が自らの源泉、根柢として、如来の願心を深か深かと自証するのである。どのように自証するののかといえは、信心とは、如来の願心の回向成就であり、如来の欲生の願心の回向成就が、最も厳密な意味における信心の成就である、ということを鋭く訓み取られたのである。衆生に発起する信心は、如来の欲生の願心の回向成就であって、願心と信心は回向成就として一如であることを、親鸞は本願成就文に感得されたのである。

四

帰命の信の内実を選択本願の行信と捉え、行も信も共に如来の清淨願心の回向成就であるという決定的な自証において、さらに重要な意味が明瞭に浮彫りにされるのである。それは、この行信において、如来の願心の回向成就と同

時に、如来の自内証の世界である無上涅槃の世界が、衆生に生き生きと開示されるという事実である。『大無量寿経』の「東方偈」に、

如来の智慧海は、深広にして涯底なし。二乗の測るところにあらず。唯仏のみ独り明らかに了りたまえり。

〔真宗聖典〕五〇頁

と讃詠されているように、如来の智慧海は、二乗の測り知るところではなく、唯仏独明了の境界である。しかし選択本願の行信において、深広無涯底なる如来の智慧海、すなわち如来の無上涅槃界が、衆生に回向成就する信心の現在に、厳然と開示されるのである。

親鸞は『教行信証』「行巻」で

しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆえに、これを「歓喜地」と名づく。これを初果に喩うることは、初果の聖者、なお睡眠し懶墮なれども、二十九有に至らず。いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば撰取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う。

〔真宗聖典〕一九〇頁

と行信の利益を述べ、さらに

ここをもって龍樹大士は「即時入必定」と曰えり。曇鸞大師は「入正定聚之数」と云えり。仰いでこれを憑むべし。専らこれを行すべきなり。

〔同書同頁〕

と勸励されている。「行巻」の結びでは、真宗仏道の大綱を示して、次のように言うている。

おおよそ誓願について、真実の行信あり、また方便の行信あり。その真実の行願は、諸仏称名の願なり。その真実の信願は、至心信樂の願なり。これすなわち選択本願の行信なり。その機は、すなわち一切善悪大小凡愚なり。往生は、すなわち難思議往生なり。仏土は、すなわち報仏報土なり。これすなわち誓願不可思議、一実真如海な

り。『大無量壽經』の宗教、他力真宗の正意なり。

〔真宗聖典〕二〇三頁

選択本願の行信において現成する浄土真宗の仏道について、行信の機と、行信の利益である往生と、行信に開かれる仏土とが、端的に示されている。さらに親鸞は、「証卷」の初めに、行信の仏道の積極性を語って、

しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至るは、すなわちこれ常樂なり。常樂はすなわちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなわちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなわちこれ無為法身なり。無為法身はすなわちこれ実相なり。実相はすなわちこれ法性なり。法性はすなわちこれ真如なり。真如はすなわちこれ一如なり。

〔真宗聖典〕二八〇頁

と述べて、往相回向の心行の一道が、一切苦悩の群生海に成就する無上仏道であることを闡明に告げている。

往相回向の心行を獲ることによって、煩惱成就の凡夫が即時に大乘正定聚の数に入るといわれ、正定聚に住するが故に必ず滅度に至るといわれる、この堂々たる自覚こそ、法然の選択本願の念仏が往生浄土の行であるという教説の、親鸞における確かな継承であり、その一層の根源化である。往相回向の心行、すなわち選択本願の行信に現成する仏道は、往生浄土の道である以上に、大般涅槃道として無上仏道である。親鸞において、往生とは正定聚の位に住することであり、必至滅度の生を生きることであったのである。本願成就文の「即得往生」の願言について、親鸞は次のように了解している。

「即得往生」というは、「即」は、すなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。

そのくらいにさだまりつくということばなり。「得」は、うべきことをえたりという。真实信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御こころのうちに撰取して、すてたまわざるなり。「撰」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだま

るを、往生をうとはのたまえるなり。

【一念多念文意】・【真宗聖典】五三五頁

「即得往生」は、信心をうればすなわち往生すという。すなわち往生すというは、不退転に住するをいう。不退転に住すというは、すなわち正定聚のくらいにさだまるとのたまう御のりなり。これを「即得往生」とはもうすなり。「即」は、すなわちという。すなわちというは、ときをへず、日をへだてぬをいうなり。

【唯信鈔文意】・【真宗聖典】五四九―五〇頁

ここに何の議論の余地もなく、往生とは本願の行信に開かれる新しい真実の生のはじまりであって、「正定聚のくらいにつきさだまる」ことを、「往生をう」といわれていることが知られる。

大経往生、難思議往生について語った『浄土三経往生文類』の文に、もう一度注意して見よう。

大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗致とす。

また、「真仏土巻」に、

往生と言うは、『大経』には「皆受自然虚無之身無極之体」と言えり。『論』には「如来浄華衆正覚華化生」と曰えり。または「同一念仏して無別の道故」と云えり。また「難思議往生」と云える、これなり。

【真宗聖典】三三三―三四頁

これらの文は往生を語る最も厳密な言葉であるが、ここで親鸞は、大経往生、難思議往生、真実報土の往生を、現生正定聚、必至滅度として内容づけていることに注意すべきである。往生を単に往生浄土として語るのではなく、現生正定聚、必至滅度、証大涅槃として語る親鸞の意趣を見落してはならない。煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌なるものが、現生に正定聚の位に住し、無上涅槃のさとりをひらくのは、偏えに「阿弥陀如来の往相回向の真因」によるの

である。「大涅槃を証することは、願力の回向に藉つてなり」(『証卷』・『真宗聖典』二二九八頁)といわれるように、証大涅槃としての往生は、如来の二種の回向によって成り立ち、実現するのである。すなわち往相回向の心行の獲得によって、現生に正定聚に住し、大般涅槃無上の大道に立つ生が実現されるのである。『浄土三経往生文類』に、

この真実の称名と真実の信樂をえたる人は、すなわち正定聚のくらいに住せしめんと、ちかいたまえるなり。この正定聚に住するを、等正覺をなるともたまえるなり。等正覺ともうすは、すなわち補処の弥勒菩薩とおなじくらいとなるときたまえり。しかれば、『大経』には「次如弥勒」とのたまえり。

(『真宗聖典』四六九―七〇頁)

と述べている。如来の往相回向について、真実の行業あり、真信心ありといって、行信をあげ、この行信の獲得に開かれる生を、親鸞は往生と解し、その内実を現生正定聚、必至滅度と捉えたのである。

親鸞は『教行信証』「教卷」の冒頭に、

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。住相の回向について、真実の教行信証あり。

(『真宗聖典』一五二頁)

といて、真宗仏道を二種回向の仏道と了解された。その往相回向を根拠として実現する生、すなわち往生を現生正定聚、必至滅度をもって内容づけたのである。往相回向の内容である真実の教・行・信・証について、親鸞は独自の了解を示している。すなわち真実教について、「一乗究竟の極説、速疾円融の金言」(『真宗聖典』一五四頁)といい、真実行について、「円融真妙の正法、至極無碍の大方」(同書一九三頁)といい、真信心について「証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海」(同書二二頁)といい、真実証について、「利他円満の妙位、無上涅槃の極果」(同書二八〇頁)などといわれている。このような四法の領解で知られることは、往相回向に支えられて実現する往生の生は、単に往生浄土の生にとどまることなく、証大涅槃の道に立つ生であることが知られる。ここに本願念仏の

一乗海は、真に大乘の仏道に価する「大乘のなかの至極」(『末燈鈔』・『真宗聖典』六〇一頁)であることが知られるのである。

『浄土三経往生文類』で「念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。」「現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。」といわれ、また『教行信証』「証卷」で「正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。」といわれる、「必ず……いたる」という意味は重要である。「必至」というのであるから、煩惱成就の身のままに、すでに無上涅槃を証したというのではあるまい。そのようなことは、煩惱成就の凡夫にはあるべくもない。煩惱成就の身を、まさに煩惱成就の身、生死罪濁の身と自覚せしめつつ、本願の名号に帰する一心帰命の信において、如来自証の無上涅槃の功德が、われらの身に現前し現成する事実を、深か深かと自証されたのである。「念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり」といわれるように、正定聚と滅度は願因と願果の必然関係である。因も果も本願海等流の因果である限り、因果は同質であり、一にして不可分である。しかしまた因と果として捉えられているところに、因は因であり、果は果であるという意味がある。そのような因と果、正定聚と滅度の内的必然関係を現わす言葉が「必至」の言である。親鸞は、『大経』の「必得超絶去、往生安楽国」の文の「必」の言を釈して、『尊号真像銘文』で、

必はかならずという。かならずといはさだまりぬというところなり。また自然というところなり。

(『真宗聖典』五一四頁・傍点筆者)

といい、さらに「自致不退転」の語句を釈す文で、

自は、おのずからという。おのずからというは、衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらいにいたらしむとなり。自然ということばなり。致というは、いたるといふ、むねとすという。如来の本願のみなを信ずる人は、自然に不退のくらいにいたらしむるをむねとすべしとおもえとなり。不退というは、仏にかならずなるべ

きみとさだまるくらいなり。これすなわち正定聚のくらいにいたるをむねとすべしと、ときたまえる御のりなり。

(同書五一三頁・傍点筆者)

と述べているように、「必」は、如来の本願力によって決定される「至滅度」を意味するのであって、本願の行信を得た人の身に、法爾自然に自証される境界である。

「必」の言は、時間的表象としては未来を指し、必ず来るであろう、という意味である。しかし願力自然を現わす「必」は、必ず来るであろうという単純な未来ではなくて、必ず来るものとしてすでに現来していることを意味している。親鸞は、「必」を釈して、「かならずというはさだまりぬ」というころなり、「また自然というころなり」といい、「自」は「衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらいにいたらしむとなり」という。「如来の本願のみなを信ずる人は、自然に不退のくらいにいたらしむる」といい、「不退というは、仏にかならずなるべきみとさだまるくらい」であり、「これすなわち正定聚のくらい」であるといわれている。親鸞は、善導の六字名号釈の「必得往生」を釈して、

必はからずという。得はえしむという。往生というは浄土にうまるといふなり。かならずというは、自然に往生をえしむとなり。自然というは、はじめてはからわざるころなり。 (『尊号真像銘文』・『真宗聖典』五二二頁)

といって、「必至」はまた「必得」の意味であって、願力自然を現わす「必」であるから、「必」により決定される「至滅度」は、すでに念仏往生の願因において内感される境界なのである。「証卷」において、

正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る。必ず滅度に至るは、すなわち常樂なり。常樂はすなわちこれ畢竟寂滅なり。寂滅はすなわちこれ無上涅槃なり。無上涅槃はすなわちこれ無為法身なり。……

といわれているように、「必至滅度」が信心・正定聚であり、それが直ちに「即是常樂・畢竟寂滅・無上涅槃・無為法身・実相・法性・真如・一如」(証・涅槃)といわれるのであるから、信と証、正定聚(因)と滅度(果)とが同一

の自覚内容であることが知られる。住正定聚のところに無上涅槃に立つて生きる、あるいは本願の信において、如来の清浄真実なる無上涅槃の功德が衆生に現前してはたらくのである、ということが知られる。

すでに掲げた「行巻」の真宗の大綱を示す文において、親鸞は、

往生は、すなわち難思議往生なり。仏土は、すなわち報仏報土なり。これすなわち誓願不可思議、一実真如海なり。

と述べられていた。「一実真如海」とは、「一実真如ともうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如来なり。」（『一念多念文意』・「真宗聖典」五四三頁）といわれているように、それは如来の智慧海である無上涅槃の世界を意味する。如来の自内証の無上涅槃の世界が、如来の本願を信ずる一念に、生き生きと現前し現成する事実を、親鸞は深い感動を込めて「誓願不可思議、一実真如海」といったのである。無上涅槃である一実真如海が、選択本願の行信において、生き生きとはたらき現前するのである。それは何故か、といえば、

この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかひの御な（名）なり。

といわれるように、如来の尊号は、われら衆生を「無上大涅槃にいたらしめたまう、大慈大悲のちかひの御な（名）」であるからであり、真実信心は、「証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海」であるからである。

選択本願の行信がその利益として実現する往生道を、親鸞は、大経往生、難思議往生と捉え、その往生道の内実を一般涅槃道として了解されたのである。往生道のはかに涅槃道があるのではない。大般涅槃道を内実とする往生道こそ、真実報土の往生なのである。親鸞が現生住正聚をもって難思議往生の内容とされた理由は、この一点にあったといえよう。住正聚とは、すでに述べたように必至滅度の生である。その必至滅度、無上涅槃を行信の利益として現生に深く深く自証されたところに、親鸞の往生理解の独自性と積極性があるといえる。